

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	〈他者〉を楽しみ続ける子どもを育成する初等社会科授業づくり
Author(s)	社会科研究部,
Citation	研究紀要 / 広島大学附属小学校 , 52 : 39 - 40
Issue Date	2024-07-30
DOI	
Self DOI	10.15027/55607
URL	https://doi.org/10.15027/55607
Right	
Relation	



〈他者〉を楽しみ続ける子どもを育成する初等社会科授業づくり

社会科研究部

1 これまでの本校社会科部の授業・単元づくりの変遷

本校では、令和2年度より「〈他者〉を楽しみ続ける子ども」の育成を目指して、実践研究に取り組んできた。これまでの研究の流れと〈他者〉を楽しみ続ける子どもの育成を目指した社会科授業・単元づくりの視点を整理すると以下ようになる。

	令和2年度	令和3年度	令和4年度
目指す子ども	〈他者〉を楽しみ続ける子ども	多様な「社会の見方・考え方」を働かせ楽しみ続ける子ども	自分（たち）の意見や意思決定に対して批判的・省察的に向き合い問い続ける子ども
授業・単元づくりの視点	① 〈他者〉を「子どもたちにとって身近な社会的事象の本質」と規定すること。 ② 子どもの生活の中に存在する、知っているようで、実はよく理解できていない社会的事象の教材化すること。	① リアルで論争的な地域の問題を取り扱い、簡単には割り切れない状況を残すこと ② 社会問題に関わる諸課題を精選し、焦点化すること ③ 様々な種類の自分の考えを表す場をつくること ④ 社会の見方・考え方を使えるように使いやすくすること ⑤ 社会の見方・考え方を振り返ることができるように、使ったことを自覚させること	① 論争問題を取り上げること ② 子どもにとって見えづらい立場や視点を取り上げること ③ 意思決定の正当性を問う発問をすること ④ メタ認知を促す「振り返り」の指導と評価をすること ↓ 整理すると... ① 多様な見方・考え方が現れる学習課題を設定する。 ② 複数回の意思決定の場（メタ認知の複層化）を作る。 ③ 子ども自身の認識を可視化する。

2 論争問題に関するスコープ整理とカリキュラム編成

社会学者の中川信俊（1999）によれば、社会問題は人間の活動の一つである「クレーム申し立て」や「対抗クレーム」からレトリック（「修辞」という狭い枠には収まらない、「説得作業に使われる言語的な資源」という一般を指す幅広い概念）が帰納的に構築される。それらを類型化すると、①自然や伝統文化、清らかさなどが失われることを問題とする「喪失のレトリック」、②あらゆる人が平等なアクセスを保障されないことを問題とする「権利のレトリック」、③人々の健康や身体の安全への危険を問題とする「危険のレトリック」、④本当のことを知らされていない、または判断力が不十分な状態で不当な利益や搾取が行われていることを問題とする「没理性のレトリック」、⑤考えも及ばないような大規模な災禍が起こるという形でクレームが組み立てられた「災厄のレトリック」の5点のレトリックとなる。

この中で、長谷智彦（2022）は、この中で「権利のレトリック」「喪失のレトリック」「危険のレトリック」を取り上げ、それぞれに「社会・経済」「環境・文化」「健康・安全」のスコープを対応させてカリキュラムを編成した。

ここで示されたスコープに加えて、日本の文化に特定の社会問題のレトリックとなる「国際化のレトリック」を加えて歴史学習を編成する。これは、「進んでいる」ソトと「遅れている」ウチということから生じる論争問題であり、今日のグローバル化した社会を捉えていく意味で極めて重要な視点となる。社会科カリキュラム編成におけるスコープは以下ようになる。

スコープ	社会・経済	環境・文化	健康・安全	国際
内容	社会福祉や公的扶助などの社会保障に関わる問題	公害や資源、エネルギーの消費や保護に関わる問題	自然災害やパンデミックの発生などの生活基盤に関わる問題	対照的な想定と結びつけられた二つの場所や集合体の中で起こる問題
キーワード	高齢者、障害者、格差雇用 貧困、格差、ジェンダー等	景観、伝統、文化、廃棄物、環境 森林、公害 資源、エネルギー等	事件、事故、災害 個人情報、病気、生命等	貿易、侵略、外征
レトリック	権利のレトリック あらゆる人に対して、平等な制度的アクセスを保障されないことを問題とする。	喪失のレトリック 自然、伝統文化、清らかさなどが失われることを問題とする。	危険のレトリック 人々の健康や身体への安全への危険を問題とする。	国際化のレトリック 「進んでいる」ソトと「遅れている」ウチということを問題とする。

3 論争問題から授業・単元構成へ

論争問題学習は、教科書通りに学習することで出合う〈他者〉以外に、主流の語り・説明から排除されがちな〈他者〉と出合わせることで、論争問題という〈他者〉を立ち上げていく。それによって、単元全体の学習が通常の学習に比べて複雑な構造となる傾向があった。それらを細かく単元計画に落とし込んで表していたが、一目見ただけでは単元全体を捉えにくいという課題があった。また、それらを並べて比較しながら、系統性や発展性を整理することも難しかった。そこで今回注目したものが、草原和博（2021）が示した I DM Inquiry Design Model ）に基づいた単元デザインの方法である。その際のツールとして、I DM のオリジナルモデルでは、ブループリント（以下、BP と表記する）と呼ばれるものが活用されている。これは、3～8 時間程度の単元の見取り図の中の、さらにその骨格だけを示したものであり、大まかな単元の構造を示したり 複数の BP を系統的、発展的に配列したり、カリキュラム作成において、非常に扱いやすいものであるため、改変してとり入れていった。

【主要参考文献】

- ・長谷智彦「小学校社会科における実問題としての「社会問題」の内容編成一領域と配列の設定に着目したカリキュラムの構築をめざして」『社会認識教育学研究』37 巻，鳴門社会科教育学会，2022 年，pp.21-30.
- ・草原和博・渡邊巧『学びの意味を追究した中学校歴史の単元デザイン』明治図書，2021 年。
- ・中河伸俊『社会問題の社会学一構築主義アプローチの新展開』世界思想社，1999 年。 （文責 眞鍋 雄大）